

# 聖書翻訳がもたらした祝福と呪い

— Vulgata を例として —

片 山 寛

## はじめに

『聖書協会共同訳聖書』という新しい聖書翻訳が昨年(2019年)の12月に出版されて、今回の神学部の公開講座<sup>1)</sup>は、その壮舉に対するお喜びというか、祝福の気持ちを表しております。日本聖書協会、これは世界的な聖書出版団体でありますところの、UBS (United Bible Societies) つまり世界聖書協会の一員であります。その団体が以前、1987年に発行していた「新共同訳聖書」に代えて、31年ぶりに新しく翻訳した聖書、これがこの『聖書協会共同訳聖書』であるわけです。

それで今日は、「聖書翻訳がもたらした祝福と呪い」という少し物騒な題をつけてお話しをするのですが、「聖書翻訳」には限らずある意味ですべての翻訳に、祝福と呪いがあるわけです。翻訳は全体としては祝福に満ちた出来事なのですが、呪いがないわけではない。翻訳の祝福というのは、それによって、外国語の書物が自国語、つまり日本語で簡単に読めるようになって、日本語の文化というものがそのぶんだけ豊かになるということですが、呪いというのは何なのか。ひとつにはそれは誤訳や誤読によって、ひどい誤

---

1) この論文は、2019年10月から12月にかけて行われた神学部講義講座でなされた講演に多少の変更を加え、さらにセプテュアギンタに関する附論を付け加えたものである。片山の担当は講義講座の第2回(10月28日)であり、その一週間前に須藤伊知郎教授の『聖書協会共同訳聖書』についての講演があったのを受けて行われた。

解が生じるということです。しかしその他にもある。それを今日は、特に中世のカトリック教会で使われていた *Vulgata* というラテン語訳聖書（日本でも20世紀前半まではミサで普通に使用されていた）についてお話したいと考えています。この聖書 *Vulgata* についても、すでに先週、須藤伊知郎先生が簡単にお話しなさいましたので、今日の私のお話にはその補足という意味もあります。

ただし、最初にお断りしたいのですが、私は神学部教員ではありますが、聖書学の専門家ではありませんので——私の専門科目は「教理史」と言っても、神学思想史です——実際に聖書のテキストを分析したり、翻訳の誤訳などについて指摘したり検討することはほとんど全くできません。聖書翻訳では素人なのです。しかし素人なりに、科目の壁を越えて、聖書翻訳について批評するなり、意見を言うことは大事だと思っております、それによって須藤先生のような本当の専門家に協力しているつもりなのです。学問分野の違いを超えて、invasion 侵入・侵略をする。それは度を越すと困ったこととなりますが、ある程度はなければならぬものなのです。そうでないと、学問というのは容易に、その専門家だけの象牙の塔になってしまうからです。

私は「教理史」という科目を神学部で教えておりますが、自分自身の本当の専門は、中世哲学、特に13世紀のトマス・アクィナスという神学者の研究をしています。しかし学校ではもっと広く「教理史」全般を、つまり古代から中世を経て近代までの神学者たちを広く浅く扱っています。つまりなるべく広い教理全体の歴史からものごとを見るということを心がけています。今日はそういう立場から、聖書翻訳の歴史、翻訳の結果としてどういうことが起こったかについて、批判的視点で述べてみたいと思います。

最初に簡単に「聖書翻訳の祝福」、そしてその後で「聖書翻訳の呪い」として、*Vulgata* 翻訳における二つの大きな問題、つまり翻訳の原典の問題と、翻訳者の問題についてお話したいと思います。

## 1. 聖書翻訳の祝福

聖書、特に旧約聖書の話が今日は中心になるのですが、これは前回須藤先生がお話くださったように、紀元前3世紀ごろまでの、主にパレスチナ地方で誕生した文書群だと考えられておりまして、その言語は主にヘブライ語（一部アラム語）であるわけです。これが紀元前1、2世紀に、ギリシア語という第二の言語に翻訳された。このギリシア語旧約聖書を、セプテュアギンタ（LXX七十人訳聖書）と呼んでおりまして、一応定説ではエジプトのアレクサンドリアという学問の町で誕生したものらしいのです。

それが、キリスト教がヘレニズム世界から、さらにそれを引き継いだローマ帝国世界に広まるにつれて、ラテン語という第三の言語に翻訳されたのです。紀元後4世紀から5世紀のことです。この「第三の」ということがここでは大事なことで、つまりはそれまでの二つの言語、ヘブライ語とギリシア語は、キリスト教聖書の原典の言葉でありました。ギリシア語は旧約聖書原典の言葉ではありませんけれども、新約聖書の原典言語でありますし、旧約でも「アポクリファ」という、いわゆる外典は、ギリシア語で主に書かれています。

ところがラテン語は第三の言語であって、要するに全部が翻訳である。言うなれば全部貸衣装を着ている第三の聖書文化がついに登場した、そのしるしの記念的な聖書であるわけです。現在、「世界聖書協会」という、日本聖書協会もそれに加入している団体が、ウィキペディアによると146カ国にあるそうなのですが、これは少なくともそれだけの数の言語文化の中に聖書が浸透していることを意味します。しかし一国の中に多数の言語があるという、多言語国家が世界には多いことを考えると、また「世界聖書協会」UBSには加入していない国もありますので、おそらくは数百からもしかすると千に近い言葉の聖書文化が世界にはあるだろうと思われるのです。ラテン語聖書は、その最初のものだということができます。つまりキリスト教の世界宗教化という出来事の始まりと密接に関係しているのがラテン語聖書であるわけです。

しかもこのラテン語聖書 *Vulgata* は、特に、ひとつの文化、たとえば日本語文化の中の小さな部分を日本の聖書文化が形づくったというのではなくて、西ヨーロッパ、つまり西欧文化全体の中心を形作るという、巨大な働きをしました。というのは、古代が終って、中世という時代 (AD.500年-1500年) は、キリスト教 (カトリックつまり「普遍」という名の教会) がこの広大な地域 (西欧) の文化の基礎をなした時代だからです。もちろんそれは、聖書翻訳だけがもたらした結果ではなく、いくたの天才たち (芸術、音楽、哲学、文学) がこの偉大なキリスト教文化の形成に関わっているのですが、そしてまたそこには、キリスト教文化・キリスト教文明が吸収し、呑みこんでいった数多くの地方文化、民族文化 (ゲルマン、ケルト、ユダヤ……) も、もちろんそこには参与しているのですが、とにかく巨大な文化を生み出した。それが *Vulgata* 翻訳のもたらした祝福であります。

つまり聖書翻訳は、その翻訳先の言語の言語文化に大きな祝福をもたらすということなのです。西欧文明が今日の世界文明の中心であるということを考えるならば、日本語への聖書翻訳はたとえば日本文化を、世界文化と結びつけるような働きをする。翻訳をすることで、文明と文明、文化と文化が出会い、そこにまた新しいものが生まれてくるのです。実際、聖書は単なる辞書以上に、現実に辞書としての働きをしている、文化と文化をつなぎ合わせる働きをしていると私は思います。私たちの西南学院大学にはいくつかのバイブルクラスがあって、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語などで聖書を読んでおられるのですが、聖書を媒介することで言語を生きた形で学べる。それを見ていてよくそう思います。

今回の新しい聖書協会訳ですが、私は基本的に、これは前回の新共同訳聖書の改訂版だと思っているのです。別訳と改訂訳の中間ぐらいの位置にあたります。おそらく翻訳をした翻訳委員の先生方は、もっと新しい学問の成果を取り入れて、もっと激しく変った翻訳をしたかったのだらうと推測しますが、編集委員の先生方はもっと保守的で、あまり激しく変えたくなかった。表現を少し読みやすくするぐらいで済ませたかった。その妥協の産物が「聖書協会共同訳」なのだと思います。

で、このことは実は、Vulgata 聖書にも言えることなのです。当時、4から5世紀、今とは違って「出版」という文化があったわけではない。聖書は全部手書きで、修道院などでの「写本」という作業を通じて拡がってゆくのですが、それでもそこにはいくつもの種類のラテン語聖書が存在していたのです。それらの中から、何百年もかけて、標準版のラテン語聖書が誕生していった。その中で最終的に勝利をしめて、中世カトリック教会の聖書として定着していったのが、Vulgata 聖書でありました。翻訳者は、ヒエロニムス 347-419と一応言われています。しかし彼以前から、これは当然ですが、すでにラテン語訳の聖書は存在していたのです。キリスト教はすでに2世紀に、ラテン語世界、つまり古代ローマ帝国西半分にも伝えられていて、「ラテン教父」と呼ばれる、ラテン語で著作をする神学者たちが出ていました。テルトゥリアヌス Tertullianus (150/160-220以後) とか、キプリアヌス Cyprianus (200/210-258) とか、ラクタンティウス Lactantius (c.240-c.320/330) とかアンブロシウス Ambrosius 334-397といった人々です。これらの人々は、基本的にはギリシア語をラテン語同様に読める人々でしたから、七十人訳があったらそれで十分だったとも言えます。しかし彼らの背後には当然ながら、数多くの一般庶民がいるわけです。それらの人々がラテン語聖書を必要としなかったわけがない。この初期のラテン語聖書は現在では全く伝わっていないのですが、たとえばキプリアヌスとラクタンティウスが、著作の中でラテン語で聖書引用をしていて、それが一致している場合がありますので、何らかのラテン語訳があったことはわかるのです。存在していたはずだという、この仮説上の聖書は、現在は「古ラテン語訳」(Vetus Latina)と呼ばれています<sup>2)</sup>。これもいくつかの種類があったらしく、それはたとえばアウグスティヌスが『キリスト教教程』De Doctorina Christianaの中で、「さまざまな翻訳の中でイタラ Itala が他のどの訳よりも優れている」<sup>3)</sup>と述べているということからわかります。つまりイタラ訳というラテン語聖書があった。

このアウグスティヌス Augustinus 354-430という神学者は、教理史上の

2) 加藤哲平『ヒエロニムスの聖書翻訳』教文館 2018年、123頁参照。

3) Augustinus, De Doctrina Christiana, in: Corpus Christianorum SL 32, p.47.

古今の神学者の中で、今日でも大きな影響力をもっている最大の神学者、少なくとも西方カトリック教会の伝統をひく教会においては、「ザ・神学者」と言えるような巨大な神学者なのですが、それまでのラテン教父と違って、ギリシア語があまり得意でなかったようなのです。そこで彼は、ラテン語の聖書 (*vetus Latina*) をいろいろ比較検討しているのです。彼は *Vulgata* の翻訳者ヒエロニムスと完全に同時代人 (7歳年下) ですので、ヒエロニムスの仕事に対して、批判を含む手紙を書いたりしています。

こうした「古ラテン語訳」がいろいろあった中で、ヒエロニムスの翻訳が *Vulgata* (「共通訳」あるいは「民衆訳」の意) として多くの人々に採用され、やがては9世紀以降に<sup>4)</sup>他の聖書を圧倒し駆逐してカトリック教会の「正典」(*canon*) となるにいたった、そしてそのために他の「古ラテン語訳」は今日では全然存在していない、という状況になった。それは、翻訳そのものがラテン語としてよくこなれていて読みやすかったということもありますが、これの旧約部分が旧約聖書の原語であるヘブライ語からの翻訳であるという触れこみが大きかったのだと思います。つまり当時、ヒエロニムスはキリスト教世界で、ヘブライ語の出来る二人としない大家だと見られていた。アウグスティヌスもそれを前提した手紙をヒエロニムスに書いている。あなたの翻訳には、他に専門家がいらないのだから、誰も文句がつけられない。しかしそれはよくないのじゃないか、というようなことを書いている<sup>5)</sup>。言わばヒエロニムスは絶対の権威だったのです。そこでここでは、「聖書翻訳の呪い」ということで、二つのこと、ひとつは「聖書の原典とは何かということ、つまり *Vulgata* はどの程度原典からの翻訳なのか」ということ、そして「聖書翻訳者の聖化」ということについて述べたいと思います。

---

4) 土岐健治『七十人訳聖書入門』教文館 2015年、140頁参照。

5) 加藤哲平、前掲書 172頁参照。

## 2. 聖書翻訳の呪い

### (1) Vulgata の原テキストは何か

Vulgata の旧約は実は、ヘブライ語からの翻訳ではなくて、基本的には七十人訳からの重訳ではないか、という疑いは、実は昔からささやかれていました。というのは、Vulgata 旧約聖書の本文を現在のヘブライ語本文と比べると、七十人訳聖書 (LXX) と一致することが圧倒的に多いからです。

ですから土岐健治先生は、ヒエロニムスのラテン語訳は、「基本的には、LXX をもとにして作られていた先行する諸古ラテン語訳聖書を基礎としたものであり、ヘブル語原典（必ずしも後のマソラ本文と一致しない）を参照・重視した、古ラテン語訳聖書の改訂版である。従って、ウルガタは完全に LXX の影響を払拭してはいない。ヒエロニムス自身の聖書解釈は、LXX に大きく依存していたことが知られており、ウルガタの訳文にも、古ラテン語訳を介してにせよ介さないにせよ、LXX の影響が認められる」<sup>6)</sup>と述べておられます。

これをもっと激しい言葉ではっきり述べたのは、ピエール・ノートンという教父学者の *Theologische Realenzyklopädie* の「ヒエロニムス」の項 (1986) です。ピエール・ノートン (Pierre Nautin 1914-1997, オリゲネス研究の第一人者) は、ヒエロニムスには、ヘブライ語から旧約聖書を翻訳するほどの実力はまったくなかったと述べているのです。以下、少し長いですが、ノートンを引用します。」 (ピエール・ノートン TRE15, S.309)

ヒエロニムスは聖書註解のかたわらで旧・新約聖書のラテン語への翻訳を公表した。これは、続く年月の間に西方教会で使用された Vulgata の基礎となったものである。

2.1 福音書の翻訳 ヒエロニムスはギリシア語テキストと照らし合わせての福音書の翻訳 (あるいは、もっと適切に言えば、すでに存在していたラテン語翻訳の校訂) から開始した。この仕事はローマで遂行された

---

6) 土岐健治, 前掲書 140 頁。

(書簡 27,1)。保存されている稿によれば、福音書の翻訳に続いて、その他の新約聖書の文書の翻訳もなされた。とはいえ、(教皇)ダマススに献げられた序文は、福音書だけに言及している。そこで、使徒言行録、書簡、黙示録は、ヒエロニムス自身によるものなのかどうか、疑問が残る。

2.2 「セプテュアギンタにもとづく」旧約聖書の翻訳 ヒエロニムスによって公表された旧約聖書のテキストには二種類がある。最初のものは完成していないが、ギリシア語のセプテュアギンタ版に従って作成されたものであり、第二のものは完成されたが、彼はそれを自身の言明によれば「ヘブライ語によって」翻訳したとしている。最初の版(ギリシア語→ラテン語)にあるのは、詩編、ヨブ、箴言、雅歌、コヘレト、歴代誌上下だけである。この版にそれ以上の旧約聖書の文書が含まれていたことを暗示するものは何もない。それは *Vetus Latina* [ヒエロニムス以前のラテン語版旧約聖書] のテキストをヘクサプラのセプテュアギンタの助けを借りて改善したものである。

後に附論で述べますが、オリゲネス185-251は、キリスト教が生み出した最初の世界的学者です。彼は6世紀(553年)に東方教会で異端宣告されたために、著作はほとんど失われました。しかし残されたわずかな著作(4, 5世紀の聖人たち — カップパドキアの両グレゴリオスなど — の抜粋や、ルフィヌスやヒエロニムス自身によるラテン語への翻訳)からも、オリゲネスの天才ぶりがうかがわれます。ここで言う『ヘクサプラ』もそのひとつですが、今に伝わるのは、正確な写本ではなく、中世カトリック教会で作成した模造品です。

元来のヘクサプラはまさにひとつのギリシア語の対観的聖書であって、オリゲネスはそこで(ギリシア文字を使って)ヘブライ語テキストに、シュンマコス訳、アクィラ訳、セプテュアギンタ、テオドティオン訳、そしていくつかの本では第5と第6の翻訳版を対照させたのである。セプテュアギンタの欄においてオリゲネスは、ヘブライ語聖書には存在しない文に、

オベロス記号〔-+÷など〕をつけ、ヘブライ語の方が余計にある文については、ギリシア語翻訳にアステリスコス記号〔※〕を差し挟んだ。この欄のテキストはしばしばそのまま筆写された。そのような手写本のひとつを（ヘクサプラの全体ではなく）ヒエロニムスは自分の旧約聖書校訂において使用している。

2.3 「ヘブライ語聖書にもとづく」旧約聖書の翻訳 その後ヒエロニムスは次々に、ほとんど（旧約）全体を含む、ヘブライ語テキストによると自称する旧約聖書の翻訳を公表した。とはいえ、彼はこの言語（ヘブライ語）を実践的にはほとんど知らなかったということが証明されている。たとい彼が聖書註解やその他の作品でラテン表記されたヘブライ語のテキストを引用していても——そして彼はこれをよくやっている——あるいはヘブライ語に対する註をつけていても、彼はすべての情報を、彼の持っていた資料（オリゲネス、エウセビオス、おそらくはカイサリアのアカキオスも）に負っているのである。それらの資料から離れるや否や、すべては彼のでっち上げになってしまうのである。

このことのひとつの典型的な例を提供しているのは書簡 20である。そこでは詩編 117(118), 25の *Hosanna* という言葉の意味が説明されている。この手紙は二つの種類の言明を含んでいる。つまりひとつの種類の言明群は、一人の著作者に由来するもので、この著者はヘブライ語の詩編テキストを目の前にしており、その中で出て来るヘブライ語の文字を正しく再現することができている。もう一つの言明群は、誰かある人によって付加されており、この著者はヘブライ語の聖書を何も持っていないくせに、最初の著者の仕事を補足しようと望んでいる。そしてそのさい、或る全く奇妙な（ヘブライ語の）正書法を示しているのである。最初の言明群はヒエロニムスの持っていた資料から由来するもので、この場合はオリゲネスに由来している。第二の言明群はヒエロニムスの自身の貢献を表している。他の諸文書においてはヒエロニムスは好んでユダヤ教の学者たちを引き合いに出す。彼らは彼にヘブライ語テキストについての情報を与えるか、あるいはヘブライ語をも教えたとされる。しかしすでに *Montfaucon* と *Bardy* が示したのだが、資料が明らかでない箇所について言うならば、ヒエロニムスはオリゲネスないしエウセビウスの報告を単純に自分自身に転記したにすぎないのである。

ヒエロニムスは従って、ヘブライ語テキストから聖書翻訳をしたり、あるいはすでに目の前にある翻訳をヘブライ語テキストに照らして検証するというだけのことでさえも、ほとんど出来なかった。彼の旧約聖書の *iuxta hebraeos* 版（ヘブライ語に

基づく版)は、同様に、ヘクサプラのセプテュアギンタに基づいて作成されたのである。おそらく彼はそのさい、(ヘクサプラの)ある新しい、欄外註釈のついた、他のギリシア語の翻訳の異読を含む版 *Exemplar* (シリア語の翻訳において保存されているいわゆる *Syrohexapla* (シリア・ヘクサプラ) のように) を所持していたのである。それはおそらくすでに校訂された版でさえあったかもしれない。なぜなら聖書テキストをその原型においてもう一度復元したいと考えたのは、オリゲネスとヒエロニムスではなかったからである(参照。エウセビウス, h. e. (教会史)V, 28, 15-17, そしてヒエロニムスによればテオドゥルフの評論)<sup>7)</sup>。

つまり、ピエール・ノートンは、「ヘブライ語からの」翻訳という点については、ヒエロニムスは、ローマの人々に対しては全く権威であるかのようにふるまっていたが、その実力は全くなく、彼の「翻訳」と称するものは、セプテュアギンタとオリゲネスのヘクサプラ、そしてその他の文献学者からの借り物であったと述べているのです。このようなノートンのヒエロニムスに対する厳しい見方に対しては、反論もあり(たとえば Megan Hale Williams, 加藤哲平など)、私は真偽を最後まで判断する能力に欠けています。ノートンは、ヒエロニムスのある意味で怪物的な人柄に対してカトリックの研究者として反感を覚えたのか、それともオリゲネス研究者のノートンは、若い頃はオリゲネスに心酔していたくせに、途中で裏切ってオリゲネスを異端として否定する側についた変節漢ヒエロニムス(後述)が許せなかったのか、もしかするとその両方かもしれないと思います。

もちろん、こうした土岐先生やノートンの見解に対して、ヒエロニムスの側から弁護することも可能です。そもそも、*Vulgata* と七十人訳が似すぎていると言っても、それは七十人訳聖書が底本にした紀元前2世紀のヘブライ語聖書が現存していない以上、水かけ論になってしまうのではないかと、とも思えるのです。つまり、現在私たちがヘブライ語原典にしている聖書本文というのは、時代的に言えば七十人訳聖書よりもはるか後の時代、10世紀のユダヤ教のラビたちが苦労して作り上げた本文、マソラー・テキスト(MT)

---

7) Theologische Realenzyklopaedie, Walther de Gruyter, Bd. 15, 1986, Art. Hieronymus, 304-315.

を採用しているのでありまして、紀元前のヘブライ語聖書というものはいくつかの例外を除いて、基本的に存在しないのです。現在の旧約聖書本文というのは、1008年と言いますから、11世紀はじめにつくられたものだそうです<sup>8)</sup>。

何でこうなったかという、中世のユダヤ教には、古い聖書本文は残さないという習慣がありまして、それは聖書本文が多数化していくことを避けるという目的があったのだと思われます。古い聖書は、ゲニザというところに一定期間保管した後に、廃棄処分にしてしまうのです。そのために、8世紀末以前のヘブライ語聖書は全然存在しないのです。ですから、最も古い旧約聖書は、紀元前1、2世紀に翻訳されたギリシア語の七十人訳聖書なのです。これはキリスト教が自分たちの聖書だと考えて写本を作りましたので、紀元後3、4世紀の写本から現存します。これは明らかに「翻訳」ですので、その原典であるところのヘブライ語聖書本文（紀元前3世紀）があったはずですが、その本文の方はユダヤ教で廃棄されたので残っていないのです。11世紀のマソラー・テキストまでの1300年もの間に、ヘブライ語本文はかなり変化したはずですが、またこの間に母音記号とかアクセントとかも加わっていますし、当然変化があったと思われるのですが、どのように変化したのかは、確かめようがないので全くわかりません。

ほとんどただ一つ、紀元前のヘブライ語テキストが保存されているのは、1947年に発見された『死海写本』という、パレスチナの南、死海という湖の近くの洞穴で、壺に入っているのが発見された写本だけなのです。これは部分的には紀元前のものを含む、新約聖書と同時代の貴重な文書群でありました。しかし残念ながらこの中には聖書はわずかしかなくて、ほぼ完全にあるのは、イザヤ書だけで、他にも詩編や小預言書や申命記などの断片がありますが、それだけなのです。イザヤ書は、研究者によると現行のマソラー・テキストとほぼ一致しているそうなのですが、それだけでは証拠になりません。

---

8) 秦剛平『七十人訳ギリシア語聖書 — モーセ五書 —』講談社学術文庫 2017年、9頁参照。

だとすると、七十人訳のギリシア語聖書は、翻訳ではありますけれども、紀元前の元来のテキストをより色濃く伝えている可能性がある。そしてヒエロニムスが旧約聖書を翻訳した4世紀末には、まだその原ヘブライ語聖書がパレスチナの地には残っていて、彼が底本にしたテキストはその聖書であるかもしれないのです。だとすると、Vulgataがマソラー本文とではなく七十人訳と一致していたとしても、それは当然であって、彼がヘブライ語から翻訳してないとは言えないのではないか。

しかもVulgataがヘブライ語本文からの翻訳であるというのは、ヒエロニムス自身がそれらの旧約各書の翻訳の序文で断言していることですし、ヘブライ語からの翻訳が大事だということも、彼がたとえばアウグスティヌスへの返書の中で力説しているからです。彼は、自分の翻訳を疑うのなら、「ヘブライ人に尋ねてみたまえ」<sup>9)</sup>とまで言って、自分の翻訳の正しさに自信を示しています。

もしピエール・ノートンの言うように、ヒエロニムスが実際的にはヘブライ語がほとんどできなかつたとすれば、つまり彼のヘブライ語知識なるものはほとんど、オリゲネスや他のギリシア教父からの借り物であったとすると、ヒエロニムスは、確かに驚異的なギリシア語とラテン語の能力によって見事な翻訳Vulgataを完成してはいるものの、学者としては不誠実な、一種の詐欺師のような人物であると言わなければならないのではないのでしょうか。カトリック教会の礎を築いた学者として、また数々の神話にも彩られた最大の聖人として、四人の教会博士<sup>10)</sup>の一人に選ばれているヒエロニムスに、そういうことがありうるのだろうか。

そこでこの後は、ヒエロニムスを例にして、「翻訳者の聖化」という問題を考えてみたいと思います。

---

9) 参照、加藤哲平、前掲書 177 頁。

10) 1295 年ボニファティウス 8 世によって制定された最初の「教会博士」は 4 人だったが、その後増えて、現在は 35 人である。

## (2) 翻訳者の聖化



Michael Pacher「4人の教会博士（ヒエロニムス、アウグスティヌス、グレゴリウス、アンブロシウス）」1483年<sup>11)</sup>

聖書翻訳をして下さった方というのは、その聖書によって救われた私たちにとって、命の恩人だということがあります。しかし聖書にそのような力があるということは、これは聖書自身の力であって、翻訳者にその能力があるわけではない。それは頭ではわかっておりますけど、しばしばそれは曖昧になります。神さまがその翻訳者を通して、自分を救ってくれたとを感じるからです。

それはちょうど、牧師先生の説教で「自分は本当に救われた」という経験を持つ人間は、ある意味で生涯、その牧師先生に感謝しつづけるようなものです。私は、青年時代に岡山バプテスト教会の梅田環先生によって、人生の

11) ヒエロニムスの足元のライオンは、彼が荒野で修行中に、足にトゲのささったライオンを助けてやったという故事から。アウグスティヌスの前には、海辺を散歩中に彼をやりこめた子ども、グレゴリウスの足元には、煉獄から彼に助けを求めたというトラヤヌス帝がいる。アンブロシウスの脇にいるゆりかごの子どもは、彼自身の幼い頃に、庭園で蜂が彼の舌に蜂蜜を垂らしたため、説教の名手になったという伝説を指す。

この絵の中では、ヒエロニムスは中世の枢機卿の服装をしているのだが、5世紀にはまだそういう役職はカトリック教会にはない。

一番暗い時代に救いだされて、お前は神学校に行けと言われて、そこから自分の人生を開かれたのです。ですから私は生涯、梅田先生に感謝しますし、先生は今でもお元気で、この12月27日に80歳の、傘寿を迎えられますので、私はお祝いに行きたいと思っていますのです。

つまり、神さまが梅田先生を通して私を救ってくださったのですが、梅田先生ご自身も私にとっては尊敬の対象でありつづけるのです。

それと同じように、聖書翻訳者はしばしば非常に尊敬されます。しかし翻訳の能力があるからといって、その翻訳者が人格的に立派な人間であるとは限りません。まして、「聖人」という、聖なる人格だというわけではないのです。ヒエロニムスはまさにそういうケースであるように思います。

まあ、今度の新しい聖書のマタイ福音書の翻訳者、須藤伊知郎先生については、ほんとうに人格的にもすぐれた先生なので、「聖人」*sanctus* とまではいなくても、「祝福された人」*beatus* ぐらいには推挙してもいいという感じがちょっといたしますけれども。私の属しておりますバプテスト教会は、「聖人」とか「福者」という制度は持ちませんので、これは冗談なのですが、しかしカトリック教会には聖人がありまして、ですからカトリック教会の正典である *Vulgata* 聖書の翻訳者ヒエロニムスは、ほぼ絶対的な聖人になっています。彼はその他にも、東方正教会でも「聖人」だとされています。それは彼が、禁欲的な修道院制度の創立者の一人だとされるからです。聖書の翻訳者で、しかもバツレヘム修道院の創立者である。聖人とされるには十分な理由です。そこで絵に描かれるときは、光輪 *Nimbus* が頭の後ろに描かれたりするのです。上に掲載したミヒヤエル・パッハーのこの「4人の教会博士」の絵では、聖霊をあらわす鳩の姿が、光輪とは別に頭のそばに描かれるわけであります。それは別にいいと言えればいいので、バプテストの私が文句をつける筋合いのものではないのですが、ヒエロニムスの生涯を振り返ると、あるいはヒエロニムスの書いたものを読みますと、そうとばかりは言っておれない気持ちにさせられるのであります。

*Vulgata* は、その全体が普通、ヒエロニムスが翻訳したことになっておりますが、先ほどのノートンや土岐健治先生の指摘でわかりますように、実際には必ずしもヒエロニムスの「翻訳」ではない部分が数多くあるのです。ヒ

エロニムスの書いた手紙をいくつか読んでおきますと、彼は確かに並はずれた天才であります。同時に非常なうぬぼれ屋で、自分がすべてギリシア語とヘブライ語の原典から翻訳したのだと自己宣伝をし続けたということも伝わって来るのです。しかし先ずは彼の生涯を、年表の形で見てみたいと思います。

### ヒエロニムス Eusebius Sophronius Hieronymus c.347-420, Jerome

- 347 ダルマティア（現在のクロアチアの一部）のストリドン Stridon に生れる。父の名はエウセビウス、母の名は不明。両親ともキリスト者であったが、幼児洗礼は当時の慣習どおり受けていない。
- 352 ストリドンで初頭教育を受ける。
- 359頃 12歳頃にローマの学校に進学する。親友ボノスが同行する。ヒエロニムスは語学の天才であった。ローマ滞在は、10年近く続いたと推測される。ルフィヌスと知り合う。
- 365頃 時期は不明だが、ローマで洗礼を受ける。
- 366頃 ローマでの学びの後、幼なじみのボノスとともに、トリーア（ドイツ中部）に行く。この頃、世俗的な出世を捨てて、観想生活に入ろうという決心をする。時期は不明だが、トリーアからストリドンに戻る。
- 372 エルサレムに行こうとして旅立つ。エルサレムを前にして、シリアのアンティオキアで病気になる、長期逗留を余儀なくされる。
- 374 病気から回復。シリアのカルキス付近の荒野で隠修士生活をする。この頃のイメージが強烈で、たとえば『黄金伝説』の、怪我をしたライオンを助けてやったため、ライオンは彼に仕えるようになったという伝説はこの時代のものである。しかし近年の研究では、彼はこの期間も外部との文通や書物の取り寄せなどを絶やしていない<sup>12)</sup>。この時期にヘブライ語を学ぶ決心をしたという。

---

12) 加藤哲平、前掲書 38 頁参照。

376 アンティオキアに戻る。司教パウリノスから司祭に叙階される。この頃『最初の隠修士パウルの生』を著し、好評を博す。

ヒエロニムスは、この最初の作品の後、立て続けに、砂漠の隠修士たちの伝説（『ヒラリオンの伝説』や『囚われた隠修士マルクスの伝説』など）をラテン語で発表します——それは東方に伝えられた伝説という要素もありますが、ある意味では小説のようなものです。彼は4世紀後半の一種の流行作家になるのです。そして彼自身が、そういう砂漠の修道士の一人であるという強烈な雰囲気を持たせようになります。

この当時、東方教会には、3世紀末ごろから修道院制度が始まっておりました。人里離れた荒野に、一人もしくは集団で住みついて、食うや食わずの厳しい修行をする。そしてひたすら神さまとの対話に生きる。そういう聖者のイメージがありました。

西方のローマ・カトリック教会にはまだ修道院制度は誕生していませんでした。それは6世紀のヌルシアのベネディクトゥス480-547のモンテ・カッシノ修道院から始まるのです。ですから、4世紀末のヒエロニムスは、ラテン語世界の人々のあこがれを一身に集めるようになります。

381 第一コンスタンティノポリス公会議に集まった、有力な教会人や神学者の知遇を得る。その後もアンティオキア、コンスタンティノポリス、カッパドキアなどで勉学を続け、アポリナリオス、ナジアンゾスのグレゴリオスなど、東方教会の代表的神学者に学ぶ。

382 東西教会の融和のための会議の使節の助手（おそらく通訳者を兼ねる）としてローマに派遣される。ローマ教皇ダマススの信頼を受け、会議の後も3年間、ローマに滞在する。聖書学者として有名になり、招かれて話をする機会が増える。

382頃 未亡人マルケラ325-410や、その弟子であった大富豪の未亡人パウラ347-404の友人となり、パウラの一家、特に娘のプレシラ364-84、エウストキウム368-419に精神的な影響を与える。この頃、旧新約全聖書のラテン語訳の志を立てる。

- 383 新約聖書の4福音書の翻訳が完成し、教皇ダマススに献呈される。
- 384 パウラの長女ブレシラの悲劇的な死——結婚と7ヶ月後の夫の死のショックから、熱病にかかり、その後断食修行4ヶ月で死亡し、ヒエロニムスは非難を浴びる。パウラとの関係が問題視され、ローマ教会から素行調査を受ける。庇護者であった教皇ダマススの死384も手伝って、ローマから退去することになる。しかしパウラからの援助は続く。

パウラの一家は、ヒエロニムスの神秘的な雰囲気によく魅せられたのです。パウラはローマの元老院議員トクソティウス *Toxotius* の妻でした。また彼女は、アエミリア家という、ローマで最も古い、大富豪の一族でもあったのです。今でもイタリア中部に行くと、アエミリア街道 *Via Aemilia* という、この一族が建設した道路の遺跡を見ることができます。

パウラはヒエロニムスと同年の35歳で、4人の娘と一人の息子がいたのですが、夫のトクソティウスが亡くなってから、人生に深く絶望して、世を捨てて修道院生活をしたいと願うようになります。そこに現れたのがヒエロニムスでした。彼女は彼を深く信頼して、お金はいくらでも出すから修道院を作ろうと願うのです。四人の娘 *Blaesilla*, *Paulina*, *Rufina*, *Eustochium* の中の長女ブレシラを襲った悲劇が、この思いに拍車をかけました。ブレシラは結婚直後の夫の死で、幸福から深い失意へと投げ込まれます。おそらく心の病になっていたのだと思われます。ヒエロニムスのすすめで断食修行をしているうちに、おそらく拒食症のようになってしまい、亡くなってしまうのです。

有名な一族ですから、当然、ヒエロニムスは非難を受けます。ローマにはいられなくなってしまう。そこで一人、ローマから去るのですが、実はパウラとはすでに約束が成立していて、パウラも遅れて、ローマから旅立つのです。下の娘のエウストキウム（出立のとき18歳）も母親に同行しました。

この頃ヒエロニムスはエウストキウムに、ものすごく長い手紙 (Ep.22) を書いています。それは、処女性を大事にし、どんなことがあってもそれを守り抜けという、今日の私たちの目から見ると問題の多い手紙です。私の友

人の荒井洋一先生が日本語に訳してくださっているのですが<sup>13)</sup>、その翻訳で53頁もある膨大な手紙です。しかしこの手紙も、聖人ヒエロニムスが書いたというので、中世の修道女たちが読むべきバイブルとなりました。

385 キプロスでパウラ、エウストキウムと合流し、エルサレムに行く。

386 パウラの援助でベツレヘムに男子修道院と女子修道院を設立。ヒエロニムスはすでにローマ滞在中に4福音書の改訂ラテン語訳を完成していたが、390年頃ベツレヘムで旧約聖書のラテン語訳に着手する。

パウラとエウストキウムがどのように考えていたのかは、資料がないのでまったくわかりません。実は二人の名前で書かれたローマの友人マルケラあての手紙が一通だけあるのですが、研究者によりますと、これも実はヒエロニムスの作なのだそうです。こうして彼らはベツレヘムの修道院で、パウラが亡くなる404年まで19年を過ごすのです。男子修道院は、ヒエロニムスの世話をする修道士が数人いた小規模なものだったようですが、女子修道院は、聖地巡礼に来るカトリックの人々の宿泊施設を併設しており、修道女も最盛期には何十人かいたようです。こうしてどんどんお金を使いましたので、パウラが亡くなるころには、膨大な彼女の財産も、ほとんど底をついてしまいました。

393 オリゲネスをめぐる争いで、反オリゲネス派に加担し、オリゲネスは異端であると主張。旧友のルフィヌスと絶縁する。

394 ヒエロニムスの弟パウリニアヌスの叙階をめぐって、オリゲネス派の司教ヨアンネスとの対立が再燃。

401 ルフィヌスが『ヒエロニムス駁論』を書き、ヒエロニムスも『ルフィヌス駁論』を書く。

---

13) 『中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』平凡社 1999 年、672-733 頁。

オリゲネス185-245という、ヒエロニムスもヘブライ語聖書を翻訳する上で多大なお世話になっているはずの人物を、彼がなぜ異端としたかはよくわかりません。後に6世紀にオリゲネスが異端とされたのは、①万人救済説、②魂の先在説、③従属説によるとされます。しかし、アドルフ・フォン・ハルナック1851-1930以来、オリゲネスは、もちろん時代的制約の中にはありましたが、異端と言うよりもむしろキリスト教の生み出した最初の世界的学者だった、というのが定説になっています<sup>14)</sup>。

404 1月26日に同い年のパウラが56歳で死去。

405 聖書のラテン語訳 (Vulgata 聖書の主要部分となった) が完成。

410 西ゴート族のアラリックによるローマ掠奪。旧知の女性マルケラはこのとき、非業の死を遂げた。

419 エウストキウム<sup>15)</sup>の急死 (50歳)。晩年のヒエロニムスはほとんど視力を失っていた。

420 ベツレヘムで死去。看取る人もいない淋しい死であった。

この生涯を見て、皆さんはどうお感じになるかわかりませんが、私は、これは相当激しい、やっかいな、粘着的な性格の持ち主だと思うのです。戦闘的で、才能にあふれていて、魅力的な、しかし矜介なと言えるほど頑固な人物。加藤哲平さんによると、若い頃にミラノの司教アンブロシウスから道徳的に非難されたのをいつまでも根に持っていて、後々書簡の中で、アンブロシウスがギリシア教父から剽窃していると罵っていると言います<sup>16)</sup>。彼の周

14) Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte I*, 1886, S. 650. 「古代教会の神学者の中でオリゲネスはアウグスティヌス以前で最も重要で影響力のあった神学者である。ディデュモスは彼を、使徒パウロに次ぐ人だと述べた。彼は言葉の最も広い意味で教会の学問の父であり、同時に神学という、4世紀と5世紀に形成され、6世紀にはその創始者 (オリゲネス) を決定的に否認したのだが、それでも彼がそれに与えた刻印を失わなかった (神学という) 学問の創始者なのである。」

15) 「エウストキウム」はギリシア語で「良き賜物」という意味の中性名詞である。彼女にはユリアという本名があったのだが、ヒエロニムスからは生涯、おそらく幼女の愛称であったこの名前と呼ばれつづけた。

16) 加藤哲平, 前掲書 46 頁参照。

囲にいた女性たちが優れた人々で、彼を支え続けたのですが、彼の方は彼女らに甘え続け、要求し続け、彼女たちを利用し支配し続けたのです。ローマを立ち去るときに彼は、アセラ Asella という女性に手紙を書いているのですが、パウラとエウストキウムは、「世間が何と言おうとも、キリストにおいて私に従う者となったのです」。

私は、これは女性の敵ではないか、許せん、と思ったりするのです。しかしもしかしたらそれはヒエロニムスに対する私の嫉妬に過ぎないのではないかと、とも思えるのですが……。

ヒエロニムスという、ほぼ絶対的なカトリックの聖人に対して、いろいろ批判的なことを書きましたが、最近、戸田<sup>とどし</sup>聡先生という、ヒエロニムスの作品も翻訳しておられる先生が次のように書いておられるのを見て、自分と同じように感じる方がいるのだと、意を強くしました。そこでそれを最後に引用させていただきます。

「ヒエロニムスについては、親しかったルフィヌスと仲たがいのするや、かつての友を口を極めて非難するとか……聖書について彼（ヒエロニムス）が書いていることのどこまでが彼自身のものでありどこからがオリゲネスのものであるのか良くわからないとか……自分のかつての不行状をさて置いて知人の娘エウストキウムに延々と純潔の美徳を説くとか（第22書簡）、そしてそのエウストキウム及び母パウラと同じ修道院に住まってしょっちゅう手紙のやりとりをしながら決して顔を合わせて食事をしないと（もちろん、食事の際に女性と同席しないということ自体は、修道士的には非常に納得の行くことなのだが）、いろいろありすぎて、解説で片づけるのはもったいなすぎるといふ思いが筆者にはある（なお、もったいなすぎるといふのはあくまでも題材としてであって、もし同時代に生きていたなら、筆者自身はヒエロニムスとは決してかかわり合いになりたくなかったらう）。」<sup>17)</sup>

---

17) 戸田<sup>とどし</sup>聡（編訳）『砂漠に引きこもった人々 ― キリスト教聖人伝選集 ―』教文館 2016 年、283 頁。

## 附論

### セプテュアギンタ LXX と聖書正典の問題<sup>18)</sup>

#### 1. はじめに

「聖書協会共同訳聖書」という大きな事業が完成しまして、私はこの翻訳事業には残念ながら関わっていないのですが、須藤先生、濱野先生、金丸先生の三人が関わられました。特に須藤先生は翻訳者のお一人として、「マタイ福音書」を担当なさったと聞いております。

それで私は、そのお祝いを兼ねまして、神学の歴史を調べる者として、聖書翻訳の歴史について、またその意味について、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。私の後の諸先生方もそれぞれのお立場からこの「聖書翻訳」ということをめぐって話されるはずなのです。

今年度の「神学研究方法論」はそういうわけで、「新しい翻訳事業への応答として、聖書翻訳をめぐる諸問題」という共通テーマで連続講義をいたします。

#### 2. セプテュアギンタ LXX とは

それで今日は特に、セプテュアギンタ、七十人訳旧約聖書ということについて考えてみたいわけです。聖書学ですでに学ばれたと思いますけれども、これは大体紀元前3世紀から紀元前1世紀に、ヘブライ語からギリシア語に翻訳された旧約聖書をまとめたものであるわけです。紀元前のものですから、もちろんいろんな版がありまして、研究の歴史も複雑です。しかし私はその方の専門家ではありませんので、聖書学のお話をしようというわけではありません。

- 土岐健治『七十人訳聖書入門』教文館2015年
- 秦剛平『七十人訳ギリシア語聖書入門』講談社選書メティエ2018年
- マルティン・ヘンゲル『キリスト教聖書としての七十人訳』（土岐健治・湯川郁子訳）教文館2005年

---

18) この附論は2019年10月の大学院神学研究科の授業「神学研究方法論」の原稿である。論文というより研究ノートに近いものだが、参考文書として掲載した。

などの本が近年次々に日本語で発表されておりまして、専門家以外の者たちも議論を知ることができるようになってきました。

最初から奇妙なことを言うようですけれども、セプテュアギンタは歴史的には最古の旧約聖書である。ヘブライ語聖書よりも、歴史的には古いものである。奇妙ですけれども、そう言わなくてはならない。ヘブライ語からギリシア語に翻訳したわけですから、当然その前にヘブライ語の本文があったはずなのですけれども、その本文は現実には文書として残っていないのです。紀元前のヘブライ語の原本が存在しなくて、ギリシア語訳だけが残っている（とはいえ最古のセプテュアギンタの写本はAD.3-4世紀）。

例外的にいわゆる「死海文書」（1947年ごろに発見）の中に紀元前のヘブライ語聖書（その断片）が部分的に含まれておりますので、これとセプテュアギンタを突き合わせれば、紀元前のヘブライ語聖書、つまりセプテュアギンタがそこから翻訳したはずの元来の旧約聖書が多少は推測できるかもしれない。しかし旧約聖書の全体をカバーするほどの聖書資料は死海文書にはないわけです。

つまり私たちは、ヘブライ語の旧約聖書を聖書の原本だとしているのですが、実はその本文というのは、ずっとはるかに後の、中世のユダヤ教のラビたちが大変な努力で再構成した、いわゆるマソラー本文（MT）という、紀元後10世紀から11世紀にできあがった本文なわけです。それはもちろん、紀元前にあったヘブライ語聖書を基本的にはひきついでているはずですし、『死海写本』の発見は、MTがかなり正確にヘブライ語本文を伝えていることを示しておりますけれども、もちろん違いとか、後世の聖書解釈（たとえば母音記号や音律の記号を含めて）も相当に混入しているのです。ですからセプテュアギンタというのは、翻訳ではありますが、実際には最古の旧約聖書である。しかもそのテキストは、ずっと長い間、新約聖書の時代から16世紀に至るまで、キリスト教ではこれこそが聖書の原テキストだとして用いられてきたものなのです。そもそも新約聖書の中に、旧約聖書が引用されたりしているのですが（土岐144によると引用の総数は4100ほどに上り、新約本文全体の1割以上は旧約からの引用文）、このほとんどは、実はセプテュアギンタからの引用で

す。逆に言えば、セプテュアギンタは新約聖書、そしてキリスト教の直接的な生みの親であります。

### 3. 聖書はなぜ聖書なのか

しかし聖書学は私の専門分野ではありませんから、詳しいことは日原先生や須藤先生に聞いていただきたいのです。で、今日考えてみたいのは、聖書はなぜ聖書なのか、聖書を聖書にしている根拠は何なのか、私たちはヘブライ語聖書（今回の聖書協会共同訳で言えばBHQ<sup>ケインツ</sup>これもまだ死海文書を取り込んではいない）とギリシア語新約聖書（UBS<sup>6</sup>）を、聖書の原本にしているのですが、その神学的根拠はどういうことなのか、それを考えてみたいわけです。歴史的に古ければよいということでは、あるいは教会の長い伝統から言えば、むしろ七十人訳の方がふさわしいのではないか。そして実は、実際にはキリスト教会は長い間、実際にそうしていたわけですから。古代・中世の教会では、セプテュアギンタこそが事実上、旧約聖書の本文の原本であった。

まあこの点では秦剛平先生が、かなり辛辣に、ヘブライ語聖書に対する皮肉や批判のようなことを書いておられるのですが（『七十人訳ギリシア語聖書モセ五書』講談社学術文庫はしがき10頁、『乗っ取られた聖書』など）、そういうことをどう受け止めたらよいのかという問いでもあります。

ヘブライ語聖書を聖書の原本にしたのは、キリスト教の聖書翻訳の歴史では、ティンダル（William Tyndale 1495-1536 火刑）の英訳聖書が最初で、マルチン・ルター（Martin Luther 1483-1546）のドイツ語訳（1534）がそれに続くものですが、それ以来、この伝統が、最初はプロテスタント教会で、そして今ではカトリック教会でも（旧約外典・アポクリファの問題は別にして）受け入れられています。つまり皆さんも私も、おそらく常識のようにして、旧約聖書はヘブライ語、新約聖書はギリシア語と考えておりますし、神学部の入学試験などでもそれを当然の前提にしておりまして、旧約聖書の原文をギリシア語ですなんて書くとブーっになってしまうのですが、それは正しいのでしょうか。

皆さんは、そんなことはもう伝統的に決まっいて、その伝統のもとで現在のキリスト教は生きているのだから、今さら考えても仕方がないとおっしゃるかもしれません。しかしすでに決まっていることについて、その根拠を理解するというのは、とても大事なことなのです。

#### 4. アレクサンドリアのフィロン

ユダヤ・キリスト教の歴史をひもときますと、この旧約聖書の原本をどうすべきか、という問題については、二つの時期があったことがわかります。ひとつは、紀元前後から3、4世紀の、教会がギリシア語原本でよいのだ、という、つまりヘブライ語は切り捨てるという決断をした時代です。

LXXはおそらくエジプトのアレクサンドリアのユダヤ教共同体の中で成立したのだろうと考えられているのですが、キリスト教以前に、ユダヤ教内部で、聖書はギリシア語訳でいいのじゃないだろうか、と考える人々が多く出た時期があったわけです。ユダヤ教も、エルサレム周辺の、アラム語を日常語に使っていた地域は別として、ヘレニズムの各地に住んでいたユダヤ人ディアスポラにとって、ヘブライ語はすでに非常に遠い言語になってしまっていた。自分で読んで理解できる言語で書かれた聖書が欲しい。ヘブライ語聖書に限るということが金科玉条であるかぎりには、ユダヤ教というのは、多くの人々（とりわけ異民族）には理解されない、ユダヤ人だけの、しかもその中でも祭司や律法学者に独占されたものになる。特に、ギリシア哲学や文学の素晴らしい作品に触れたディアスポラのユダヤ人自身から、原本としてのヘブライ語聖書はそれでいいとしても、LXXはそれなりに聖書として認められるべきだ、という声が高まってきたのです。

そういった声を代表するのが、アレクサンドリアのユダヤ人哲学者フィロン BC.15-AD.45でした。彼はLXXを擁護して、これがそもそもセプトゥアギンタと呼ばれるようになった由来の物語を次のように伝えているのです。(アレクサンドリアのフィロン『モーセの生涯』2,37-40)

つまり72人の長老たちが、それぞれ自分で聖書を翻訳して、それを持ち寄ったときに、その訳文が一語一句異ならず、ぴったりと一致したという、

奇跡そのものと言ってよい物語がここで主張されているのです。偶然ではこういうことはありえない。そこに神の靈感がはたらいたと言う以外、ありえないような奇跡が LXX の成立にはあった、とこの物語は主張しています。そこからセプテュアギンタ (70) という名前も出ている。

つまりこれは、LXX は間違いなく「聖書」なのだ、神の靈感がここには働いていて、単なる翻訳ではありえない。翻訳者そのものが神の霊の下にあった、ということをも主張しているわけです。

## 5. オリゲネス

ヘレニズムのユダヤ教の中にすでにそういう、ヘブライ語聖書は自分にとってはもう必要がない、ギリシア語で十分だという声があった。それに対して、いやそうではない。ヘブライ語聖書こそほんとうの聖書なのだ、という人々もいたわけです。紀元2世紀に次々と登場した聖書の新しいギリシア語訳である、アクィラ訳、シュンマコス訳、テオドティオン訳がそれを示しています。これらはヘブライ語原文により近いギリシア語訳でした。特にアクィラ訳などは、これは翻訳というよりは、逐語的な単語表に近いものだと思います。ちょうどミルトスのヘブライ語聖書対訳シリーズのようなもので、こんなもの使ったら日原先生に叱られますけど、紀元2世紀のユダヤ教徒の中にも、ヘブライ語で苦勞していた人々がいるのです。

キリスト教ではすでにその前から、当たり前のようにして LXX を使っていたと思われるのですが、紀元3世紀の半ばに、オリゲネスという偉大な神学者が出た。キリスト教の生み出した最初の世界的な大学者です。彼も当たり前前のこととして LXX を使っていたのですが、この人の偉大なところは、ユダヤ教にも目配りをしていて、ユダヤ教のラビたちとも交わりがあったらしいのです。そして彼は、ヘブライ語聖書とギリシア語の聖書と、どちらが聖書であるべきかを学問的に実証しようとしたのです。ヘブライ語を自由自在には読めなかったらしいオリゲネスが、これをしようとして作ったのが、「ヘクサプラ」という対訳聖書です。ヘクサとは六ですが、六欄聖書を作ったのです。これはもう信じがたいほどのすごい業績で、見開きというか、後

世のコーデックスでいう2頁に、①ヘブライ語本文、②その音写、③アクイラ訳、④シュンマコス訳、⑤七十人訳、⑥テオドティオン訳を並べたものなのです。ヘクサブラは今ではそのほんの一部しか残っていないのですが、当時の記録によると（オリゲネスは紀元6世紀に異端とされて、その著作のほとんどは現在では失われてしまったのですが、彼の著作の一覧表だけは残っている）、全部で50巻もの大著であったらしい。ヘブライ語聖書のすべてを網羅していたのかどうか、明らかではありませんが、何人かの助手を使って、集中してある時期に（230年と240年の間、泰入門246）作り出したと考えられています。

オリゲネスがこのような作品を作り出した理由は、LXXがキリスト教の聖書としてふさわしいということを証明しようとしたということだと思われます。また彼はLXXそのものの校訂にも貢献しておりまして、彼以前にはLXXの版にはいろいろな種類があったのですが、このヘクサブラでオリゲネスがそれらを比較して、統一的な本文を第5欄に書いた。そこでこの第5欄だけがその後書き写されて、LXXの標準版になっていったようです。

## 6. その後のユダヤ教—キリスト教とLXX

その後ユダヤ教とキリスト教は、使用する聖書そのもので分れていきます。キリスト教がギリシア語LXXを聖書の原本に採用したのに対して（もっともカトリック教会の正式採用は16世紀のトリエント公会議）、ユダヤ教はヘブライ語テキスト以外のものを聖書としては拒絶する方向に向かい、タルムードやミドラシュなどのラビ的文学を充実させる方向に進んでいきます。その作業の中で、すでに述べたMT（マソラー本文）も10世紀に完成するわけです。

キリスト教が、大いなる成長の世紀、4世紀にローマ帝国の国教となり、ヨーロッパの支配的な宗教として文明の中核を担う宗教に成長を遂げていったのに対して、ユダヤ教はそのキリスト教文明の中の（後にはイスラーム文明の中でも）マイノリティーとして、ひとつの民族宗教という性格を強めて、存続する道をたどったわけです。これについて、つまりキリスト教中世というものについて、詳しい話はいたしません。

## 7. 宗教改革

このような聖書の状況に対する大いなる変化が、「宗教改革」であったわけです。ルターは1517年の宗教改革の勃発後、1521年の帝国議会での「私はここに立つ」という英雄的な宣言の後、1521年から22年5月まで、約1年間ザクセン選帝侯フリードリヒ（賢侯）にかくまわれて、Wartburg 城に潜伏するわけですが、このときに新約聖書を（エラスムスの）ギリシア語とラテン語からドイツ語に翻訳します。その後、1534年には旧約聖書もヘブライ語とギリシア語とラテン語からドイツ語に翻訳を完成して出版します。ルターがどの程度ヘブライ語に精通していたのかは、今でも議論がありますが、はっきりしているのは、ユダヤ教のマソラー本文（MT）に採用されている書目だけを旧約聖書だと認めて、七十人訳のいわゆるアポクリファ（聖書協会共同訳によると、旧約聖書続編つまり、トビト、ユデイト、ギリシア語エステル、マカバイ1、2、知恵の書、シラク、バルク、エレミヤの手紙、ダニエル書補遺、（ギリシア語エズラ、ラテン語エズラ）、マナセの祈り、の13書、普通はエズラ2書を除く11書）は旧約聖書から外して、続編だとしたわけです。とはいえ、ルターはこの外典も別にまとめて翻訳して、補遺のような形で自分のドイツ語版聖書（Lutherbibel）の新しい版の中につけ加えておりますので、どの程度明瞭に、彼がギリシア語原文のアポクリファを聖書から排除しようとしていたのかは、はっきりしません。とにかくルター以降、プロテスタント教会（聖公会は中間的）の聖書は、旧約39巻新約27巻の66巻になったわけです。アポクリファは参考文献ではありますが、聖書そのものではない、という考え方がプロテスタント、とりわけカルヴァンの影響を受けた宗教改革急進派では確立した。

ですから、聖書の原典を現在のように、ギリシア語新約聖書、ヘブライ語旧約聖書にとった、そしてキリスト教の原点はこの二つの聖書にあるのだとしたのは、実は16世紀のルターが歴史的には最初の人であったわけで、それ以前のキリスト教ではそういう時代は全くありませんでした。カトリック教会は Vulgata というラテン語聖書、これはヒエロニムスが翻訳したと言われておりますけれども、おおまかに言えばおそらく LXX と NT からのラテン

語訳（ヒエロニムス自身は、旧約はヘブライ語から翻訳したと主張していますが、最近の教父学ではほぼ否定されつつあります）、それが聖書原典でしたし、ギリシア正教会では、セプテュアギンタとギリシア語新約聖書が、今でも基準聖書であるわけです。

## 8. まとめ

以上述べたことを総括しますと、LXXは長い間、キリスト教にとっての旧約聖書であったけれども、宗教改革以後、特にプロテスタント教会ではヘブライ語聖書がそれにとって代った、あるいはキリスト教全体としてみると、旧約の基準聖書がヘブライ語聖書にとって変りつつあるということであり、ます。

最後に考えてみたいのは、その意味であります。秦剛平先生は、LXXが<sup>すな</sup>廢れて省みられないのがご不満のようなのですが、私もLXXはもっと重視されてしかるべきだとは思いますが（つまりLXXが否定されているのは、キリスト教中世が否定されて、「暗黒の時代」として、なかったかのごとくに受け取られているという、「近代」の一般的傾向と軌を一にしていると思いますので）、しかしLXXこそが旧約聖書の原典であるべきだとまでは思わないのです。つまり私は、ルターの選択は正しかったと思うのです。

最後にその理由を二つ述べます。ひとつは組織神学的な理由で、もうひとつは歴史神学的な理由です。「教理史」という私の科目は、その二つ（組織神学、歴史神学）の側面を持っています。

### ① 組織神学的な理由

正典 canon とは何であるのか、というとそれは、「規準」という意味です。聖書を規準とすることによってキリスト教は自己規定しています。ユダヤ教がヘブライ語聖書とタルムードによって自己規定しているように、またイスラームがクルアーンとハディースによって自己規定しているように、キリスト教は「旧約聖書と新約聖書」によって自己規定しています。

そしてなぜこの二つの聖書がキリスト教を規定するかというと、それはこ

れらが、キリスト教の中心である一人の方、イエス・キリストを指し示すからであります。この方を指し示すからこそ、聖書は聖書である。単なる歴史資料ではなく、聖なる書物として教会で毎週読まれ、学ばれるのです。新約聖書は、この方についての証言であり報告であります。この方の教えとわざ、この方に従った人々のその後、そして将来について書いてあるのが、新約聖書です。そして旧約聖書は、歴史学的にはこの方の背景であるユダヤ民族の歴史の記述なのですが、伝統的な神学の言葉で言えば、この方についての「預言」が旧約聖書であります。ユダヤ民族の歴史は「イエス・キリスト」という一枚の絵の背景であり、枠組みである。

そして枠組みとしてのユダヤ民族の歴史をトータルに表現したものとしては、LXXよりもヘブライ語聖書の方がずっとふさわしい。それは、彼らがその生きた時代の中で、その土地において、その歴史の中で直接的に語った証言そのものに近いからです。

LXXというのは、ヘレニズムの中でギリシア・ローマの文化の影響を色濃く受けたユダヤ民族が生み出した翻訳です。イエス・キリストと時代的には近く、新約聖書の誕生と密接な関係のある聖書です。新約聖書の直接的な生みの親はLXXだとさえ言っているのです。しかしそれが私たちに伝えて来るのは、ヘレニズムにある程度影響を受けて、言わばヘレニズム的に飼いならされたユダヤ教の姿です。そこからキリスト教が出て来たわけですから、私たちはそれを歴史研究の上で重視すべきだとは思いますが、それ以前の、ユダヤ教がヘブライ的な歴史の中でイエス・キリストを待望していた、そして預言していた。それがより重要だと思うのです。

## ② 歴史神学的な理由

歴史神学的に言うとそれは、キリスト教とは、古代ユダヤ教を基礎にして、それにイエス・キリストの教えを付け加えたものということなのです。古代ユダヤ教という、基本的には三つの教義を持った信仰があった。①唯一の神、②契約思想（神の選んだイスラエル）、③終末論（メシア思想）、これがユダヤ教の教えの中心ですが、これに第四の要素としてイエス・キリストを

信じるということが付け加わったものがキリスト教である。

つまりキリスト教徒とは、イエス・キリストに出会い、この方を救い主として信じることにしたユダヤ教徒であるわけです。それがキリスト教の元型です。たった一つ新しい教義が付け加わったみたいですが、この第四の要素が中心になって、ユダヤ教の三つの教義がそれぞれ変貌を遂げたのです。

①三位一体の神，②新約思想（ユダヤ民族のみならず万人の救い，神とキリスト教会との新しい契約），③終末論（イエス・キリストの再臨），これがキリスト教の中心的な教義であるわけです。

このような信仰のあり方をはっきり示しているのが、ヘブライ語旧約聖書とギリシア語新約聖書であります。つまりキリスト教というのは、その中心にユダヤ教を、自分自身とはどこか異質的なものとして大切に保持しつつ存在している、二重構造を持った宗教であります。キリスト教とは、自らの内なるユダヤ教と対話しつづける宗教だと言ってよいのです。

このことは、ルターの宗教改革を理解するためにも役に立ちます。宗教改革とは、全体として見るならば、ユダヤ教との和解でありました。カトリシズムが古代におけるその最初の頃（2世紀初め）から反ユダヤ主義をその中に含んでいたのに対して、初期の、少なくとも宗教改革を始めた時期のルターは、ユダヤ教に親和的でした（しかし晩年には反ユダヤ主義的な書物『ユダヤ人とその偽りについて』を書いた——徳善162。それは領邦教会制の進行と関係がある）。プロテスタンティズムというのは、キリスト教の再ユダヤ教化だったと言える側面があります。①国家的な、支配者の宗教（体制的宗教）から、マイノリティーの宗教（反体制的宗教）への変化，②聖職者中心の宗教から信徒中心の宗教への変化（近代以前は、ユダヤ教は祭司階級を持たない宗教でした。ラビたちは言わゆる「聖職者」ではなく、信徒として普通に労働していたのです）。③何よりも、儀式（礼典）中心の教会から聖書の学び中心の教会への変化。これらの変化は、カトリシズムからプロテスタンティズムが脱して、再ユダヤ教化したと言えるものです。ルターやその他の宗教改革者たち（メランヒトン、ツヴィングリ、カルヴァン）がどの程度このことに自覚的だったのかは、わかりません。しかし彼らが sola

fide, sola scriptura を貫く中で、1世紀のラビ的ユダヤ教のあり方（①マイノリティー、②エルサレム大神殿ではなく地域のシナゴーク中心、③聖書の学び中心）は、確実にプロテスタンティズムの中で実現していきました。とりわけバプテスト、メソジストなどの「自由教会」の中で、それは顕著であったと思います。

ユダヤ教とキリスト教の和解と相互理解、それが宗教改革以来のキリスト教の課題である。そのことを述べて、私は授業の締め括りとしたいと思います。